

1人1台端末の活用による実践事例

学校名	県立早島支援学校	実践者名	濱田 真菜
実践場面 (教科、領域、行事等)	美術（肢体不自由部高等部Ⅰ類型「美術」）オンライン授業		
単元・題材名	色彩の仕組み		
学習目標・ねらい	「色光」と「色料」の混色について身の回りの事象とつなげながら理解することができる。		
対象の児童 生徒の実態	・ 友達や教師と会話でコミュニケーションを図ることができ、自分の考えや意思をはっきりと伝えることができる。 ・ 自宅で Meet 等のオンライン接続をする際は、母に手伝ってもらいながら、自分で行っている。		
活用の概要（使用アプリ名を含む） ※写真も掲載する			
（１）iPad を準備し撮影用の台に固定する。（図１） Classroom を通じて、同時双方向授業やその他の学習保障の計画を、生徒の iPad に配信する。 （２）授業の予定表にしたがって、生徒（自宅）のパソコンと学校のタブレットを Meet で接続する。 （３）生徒の iPad には授業で使うプリント等を送っており、GoodNotes でプリントを開き、授業で使用して提出する。 （４）同時双方向での授業を実施する。授業後に必要な連絡事項があれば、連絡を続けて行うこともあった。			
（ 図 1 ）			
活用のポイント・改善策等			
（１）オンラインでの授業をすることで、生徒の様子を確認しながら授業を進めることができる。 （２）学習意欲はあっても、授業に参加できていない状態が続いていたが、移動の負担がなくなり学習の機会が増えた。 （３）同時双方向授業の取り組みの開始当初は、登校できず学校になじめないことがあったが、同時双方向授業を繰り返すことによって、教員との関係を深めることができ、教師からの呼びかけに応じる場面や、自発的な発言が増えてきている。 （４）今後の課題として、現在のカメラを固定した形での同時双方向授業では、生徒が自らの意思で見る方向を決められない。改善策として「kubi」を使って生徒が主体的にカメラを動か			
（ 図 2 ）			

し、積極的に授業に参加できるようにしていきたい。また「kubi」を使うことで、自分の意思で学習中の友達の様子を見られるようにして、生徒同士のつながりを作っていけるようにしていきたい。

（５）この実践からおよそ２か月が経過した現在、生徒本人のカメラをオンにした状態での授業の参加ができるようになってきている。それに伴い、少しずつ同じ学年の生徒とも関わりを持てるようになってきている。

（６）Meet の活用は他の授業でも継続している。体育の授業では、ボッチャを行う際に、Meet を使ってボールを投げる角度等を伝え、学校側で教員が指示に合わせて投げることで授業に参加している。